

「生活を楽しむ子」を育む授業づくり

～合同生活単元学習を通して～

山本 恭子*, 秋山 睦*, 中垣 克彦*, 酒井 博文*
山口 和恵*, 馬場理恵子*, 吉井 稔*

Creation of practices which aim at “A child who enjoys his/her life” —A joint practice of “Unit of life” at the lower secondary department of Tottori University School for Children with Special Needs—

YAMAMOTO Kyoko, AKIYAMA Mutsumi, NAKAGAKI Katsuhiko,
SAKAI Hirofumi, YAMAGUCHI Kazue, BABA Rieko, YOSHI Minoru

鳥取大学附属養護学校*

キーワード 生活を楽しむ子 合同生活単元学習 自分づくり 仲間とともに
child who enjoys his/her life joint practice of “unit of life” full development of
personality with friends

1. はじめに

鳥取大学附属養護学校中学部は、生徒が1年6人、2年7人、3年6人の計19人、教員は担任各2名ずつと学部主事1人の計7人というこじんまりした世帯である。平成14～17年度の4年間にわたり、『生活を楽しむ子』を育む—『自分づくり』を基盤とした授業づくりを通して—の研究テーマの下に実践研究をすすめてきた。平成16年度までの成果の一端は、『自分づくりを支援する学校』（注1）（明治図書）に収録されている。ここでは平成17年度の取り組みについて「合同生活単元学習」に視点をあてて、思春期の「自分づくり」を基盤とした授業づくりについて報告する。

2. 本校中学部のめざす生徒像と自分づくりについて

（1）中学部のめざす生徒像

中学部の教育目標は、「友だちとの関わりを大切に、意欲的に活動する中で、豊かな社会生活を送るための力を身につける。」である。そして、目標に向けてめざす生徒像を、「自分なりのめあてをもって、仲間と一緒に意欲的に活動する子」とし、「見つけよう、掘げよう、仲間とともに」のフレーズに要約している（図1）。

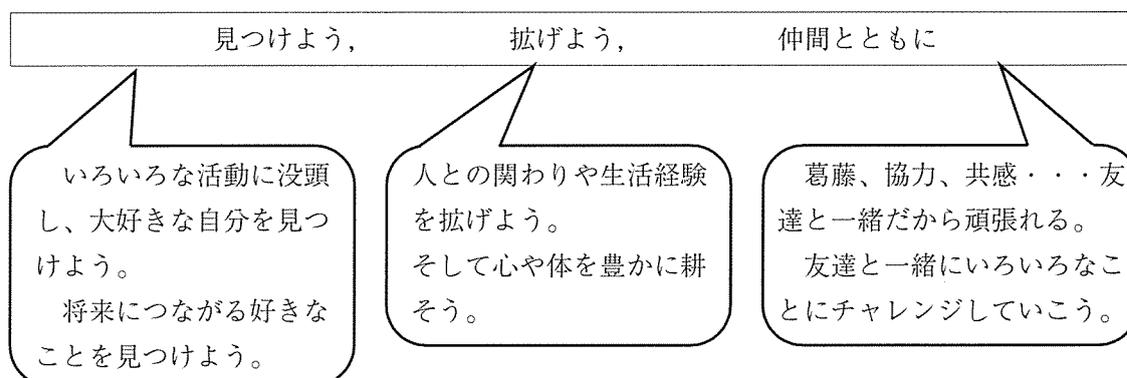


図1 中学部のめざす生徒像

(2) 思春期の「自分づくり」と友だち・仲間

二次性徴を迎え、心も体も思春期まっただ中の子どもたちにとっては、これまでの対大人から、友だちへの関心がぐっと強くなっていく。仲間の中で時に葛藤し、揺れながらも、“友だちと一緒に最後までがんばれた” “チームのために友だちの分までがんばっていた” “友だちに褒められて、先生に褒められるより嬉しそうだった” など友だちや仲間との関わりの中で、刺激されたり、励まされたり、認められたりしながら自信をつけのびていく。中学部の自分づくりに、友だちや仲間はかけがえのないものだと思う。そこで、中学部では授業だけでなく一日の学校生活全体を通し、友だちとの関わりや仲間づくりを大切にしていっている。

3. 生活単元学習の取り組み

(1) 生活単元学習のねらい

中学部では、生活単元学習のねらいを次のように立てて取り組んでいる。

- ・体験を広げ、生活に役立つ実践的な力をつける。
- ・集団での学習を通し、仲間とのよりよい関わりを育てる。

週時程は、じっくり取り組めるように午前中の3・4校時を連続にし(60分)、見通しが持ちやすいように月～金曜日を通して帯状の時間帯でとっている。年間計画は、行事の年間配置を考慮しつつ、繰り返しやつながり・発展を考えて作成している。基本的にはクラス単位で行うが、よりダイナミックな活動を保障するために学部合同の学習を計画的に組んでいる。

(2) 生活単元学習はおもしろい!

友だちや仲間との関わりを大切にしたい集団での学習を通し、楽しく高め合う生徒たちの姿を、生活単元学習の中でたくさん見てきた。生徒たちにとって、生活単元学習は、一日の生活の中で期待感が持てるメインの学習であり、教師にとっても、生徒の笑顔や変容をたくさんみることができ、準備に多くの時間や話し合いが必要なもののそれ以上にやりがいを感じられる学習である。

それは、①教科・領域を合わせた指導の形態であり、テーマに向かう諸々の活動を通して、結果的に領域、教科の内容を習得できること、②集団で、単元の活動に共同して取り組み、人との関わりを持って活動できること、③また単元は、豊かな内容で組織することができ、生徒

が多種多様な経験ができるように計画できること、④単元終了後、生徒たちが大きな満足感や成就感を味わうことが期待できること、⑤単元の活動によって身につけた関心・技能・習慣・態度などが生活に生かされること、等のよさがあるからである（注2）。

主な学習内容としては、買い物、調理、話し合い、パソコン操作、公共交通機関の利用（写真1）、公共施設の利用等の知識・理解・技能・関心・マナー・社会性・コミュニケーションなど 教育支援計画の今年度の目標が年間を通じて実現ができる内容にしている。



写真1 公共交通機関の利用

（3）合同生活単元学習のよさ

平成16年度に学部一丸となって取り組んだ「ふれあいまつり」が大成功に終わり、学部の生徒・教師が全員で取り組む一体感とその成果を実感した。実は年間計画ではクラス単位の活動のはずであったが、「各クラスで行うのか、学部みんなで取り組むのか」という話し合い（図2）の結果、学部合同で「うどんつるつる、みんなにこにこ亭」を実践することにした。小麦粉から丼ぶりまですべて手作りにこだわり、「大好きな家族の〇〇さんに食べてもらいたい」と各自の役割を最後までがんばり、仲間と一緒にやり遂げてバンザイをした達成感を生徒たちも教師も忘れることができなかったのである（写真2）。

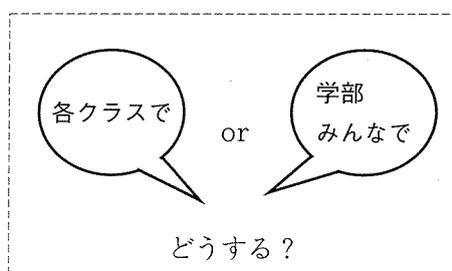


図2 学部での話し合い



写真2 うどん屋さん大成功！

した。小麦粉から丼ぶりまですべて手作りにこだわり、「大好きな家族の〇〇さんに食べてもらいたい」と各自の役割を最後までがんばり、仲間と一緒にやり遂げてバンザイをした達成感を生徒たちも教師も忘れることができなかったのである（写真2）。

授業づくりの研究をすすめるにあたり、私たちが今回も学部合同の生活単元学習を選んだのはごく自然なことだった。昨年度の反省を生かし、授業づくりをさらに発展させたいという教師の夢もあった。加えて、実践を通し、合同学習には次のようなよさがあることを実感していたからである。

- ・同一教材で多様な活動が準備でき、生徒一人ひとりに即した個別の目標が織り込みやすく、集団化と個別化が図れる。（同一教材・複数課題）
- ・ダイナミックな活動や場の設定ができ、生徒も教師も盛り上がる。
- ・生徒同士のクラスを超えて仲良くなり、その関わり合いや協力は、自分づくりにつながる。
- ・教師にとって、担任外の生徒の理解や支援について共通理解が進む。
- ・話し合いに時間がかかるが、多くの視点で子どもや授業がみえてくる。

（4）生活単元学習の中で「生活を楽しむ子」の姿について

本校のめざす「生活を楽しむ子」の姿のイメージは、憧れや興味・関心をベースに「やってみたい」という思いを膨らませ、活動に主体的に取り組んでいく。その過程で生徒は自己決定や工夫をし、自分はこのがしたい、誰々と一緒にしたい、こんなふうになりたい等と「自我」を発揮する。時には挫折しそうになったり失敗をすることもありますが、自己肯定感がくじけそうな

自分を支える。そして活動を終えたとき、達成感や成就感を感じる。この膨らんだ気持ちを友だちや教師と共感し合い、分かち合うことによって、自己肯定感をさらに高めていく。また人のために役立つ自己有能感も育っていく。そしてまた次の活動へ取り組んでいこうとする。このようなサイクルが回っている姿を「生活を楽しむ子」の姿と捉えている。

「生活を楽しむ子」を育てる授業づくりをするにあたり、この生徒主体の内発的な「自己運動」のサイクル（注3）に中学部の生活単元学習をあてはめてみたのが図3である。わたしたちは、特に友だちや仲間との関わりの中で、生徒一人ひとりの自己運動のサイクルが回るように丁寧に授業を組み立て、支援をしていきたいと考えている。

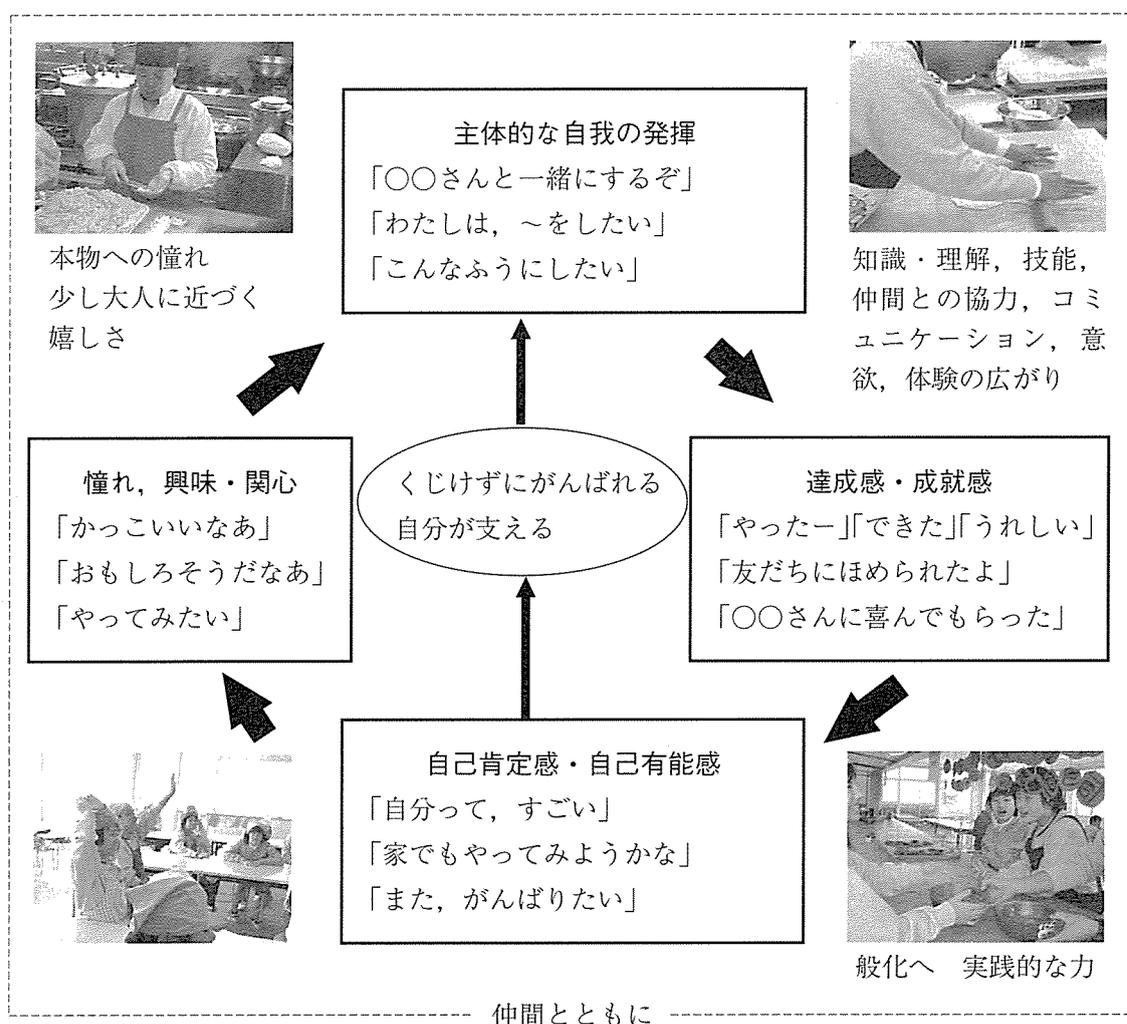


図3 生活単元学習の中で「生活を楽しむ子」の姿（自己運動サイクルが回っている姿）

(5) 思春期の自分づくりに留意した授業づくり

本校では、「自分づくり」を授業づくりの基盤としている。そこで思春期の生徒たちの自分づくりに留意した6つの視点を考えた(資料1参照)。視点を明確にすることで、生徒一人ひとりの自分づくりの段階に応じた支援が充実し、さらに自己肯定感を高めることができる。また、共に授業をつくる教師集団に具体的な支援の共通認識ができると考えた。

資料1 思春期の自分づくりに留意した授業づくりの視点

・自分たちでテーマを考えるように

新しい単元に入るとき、共通の課題意識を育む“あたため”を大切に、自分たちで思いを出し合ってやりたいことやテーマを決めるようにする。

・自分でできるように

生徒一人ひとりが主体的に取り組み、活動後首尾よく成就し満足感がもてるように、活動内容や活動量、教材や補助具、手順図、構造化などの工夫をする。また、一人ひとりの自分づくりの段階を知り、それに応じた目標設定や支援をする。

・自己決定や自己選択を大切に

自己決定や自己選択の場をつくり、自分で自分のやりたいことを決め、自分なりの目標がもてるようにする。

・本物志向で

できるだけ、本物や本物に近いものを体験し、あこがれの気持ちを育てるとともに、大人に近づいていく喜びがもてるようにしたい。

・友だちとの関わり・仲間づくりを大切に

友だちや集団との関わりを大切にした集団編成をしたり、自然に協力や教え合いが生まれるような場面を設定していく。

・自己評価や友だちからの評価も大切に

学習の終わりに集団の中で成果や感想を発表し合い、自分を振り返るとともにお互いを認め合えるようにする。学習の過程でも、励みになるよう、タイミングよく教師や友だちお客さんなどからの評価を生徒に返していく。

(6) 生活単元学習を実践創造サイクルにあてはめてみる

一方、わたしたちはこれまで実践をより確かなものにしていくために、「子どもを深く捉えよう、ねらいを明らかに、実践を確かに」という実践創造サイクルを意識しながら授業づくりを進めてきた。図4が合同の生活単元学習の実践創造サイクルである。それぞれ相互に関連し合っているが、特に生徒の実態やニーズ、保護者の願いなどをもとにして作成した個別の教育支援計画の目標を授業の中にどう織り込み、どう実現できるか考えることが重要である。また保護者との連携により、学習したことが日常に般化し、生きた力になっていく。授業後は、評価を通して生徒の変容や次の授業づくりが見えてくるとともに教師の力量を高めていくことができる。

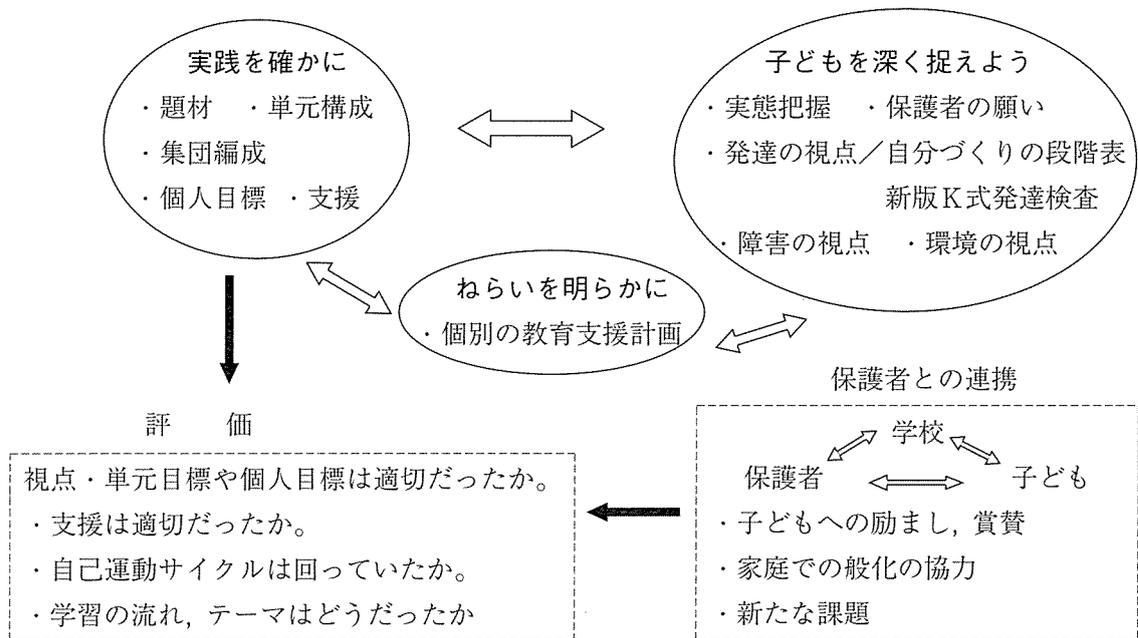


図4 実践創造サイクル



図5 題材を決める話し合い

4. 合同生活単元学習の授業実践

(1) 題材の決定 ～なぜワンタン屋さんなの？

以上の研究や取り組みをふまえ、「中学部合同の生活単元学習において、思春期の自分づくりに留意し、実践創造サイクルにそって丁寧に授業づくりをすることで、生活を楽しむ子を育む（自己運動サイクルが回り、自己肯定感を高めていく）ことができるだろう」という仮説のもとに、中学部全員による合同生活単元学習を実践することにした。

そこで、中学部7人の教師で、すでに取り組みを終えた秋のふれあいまつりでの合同「にこにこ喫茶」や、平成16年度の「うどんやさん」とのつながりと発展を大切に、何を題材に取り上げるか話し合った。「ワンタンスープの店」に決まるまでの教師の話し合いの様子を図5に示した。

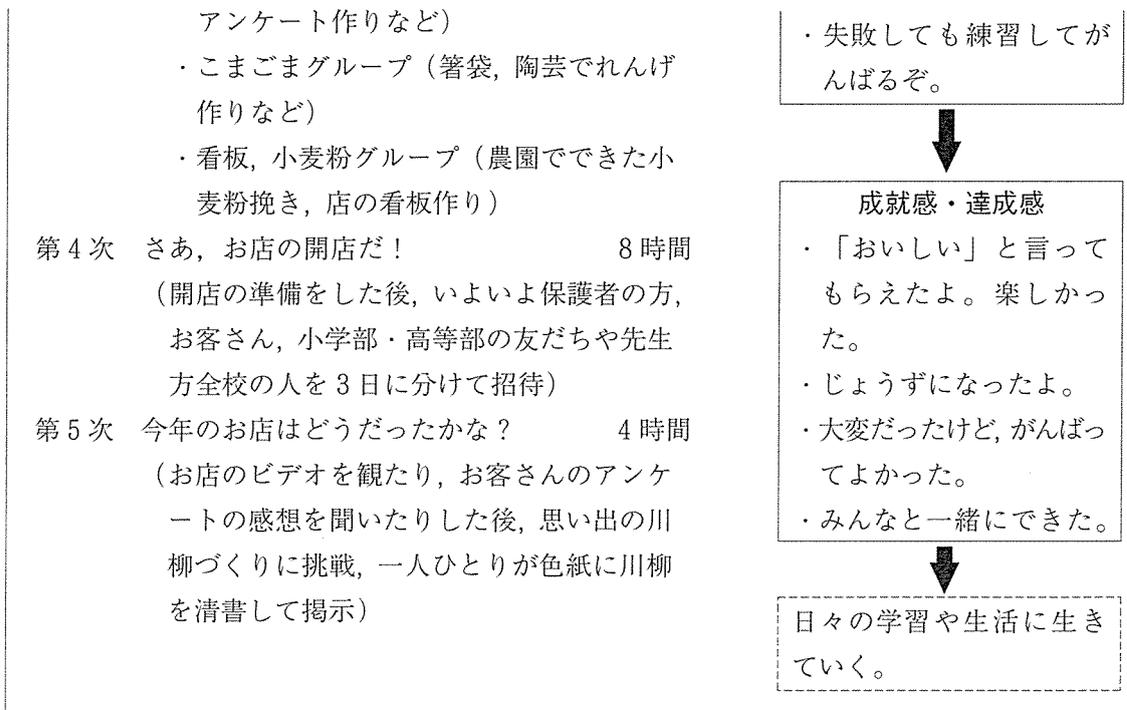
先に述べたように、「お店」の活動は、見通しが持ちやすく、多くの活動が設定でき、仕事の担当を自分で選び、生き生きと活動し、大きな満足感と自信を得た体験を今年もさせたいという教師の強い思いもあった。

(2) ワンタン屋さんの学習指導計画

単元名は生徒たちと話し合って決めた。これは、生徒たちが自ら取り組んでみたい活動として選び取る過程を意図的に仕組み、単元活動に引き込んでいくための工夫の一つである。指導計画（全45時間）は資料2の通りである。

資料2 ワンタンのお店の学習指導計画

単元名	「あつあつワンタン, みんなハッスル亭」 ～今年は, ワンタンでおもてなし～	にこにこ喫茶での達成感 ・たくさんのお客さんが来てくれたよ。 ・また, お店がしたいな。
第1次	今年もお店したいな, どうする? 6時間 (中華料理店でワンタンのサービスを受け, 自分たちも作ってみたいと思う)	↓ 憧れ ・ワンタンおいしかったね。作ってみたいな。 ・お家の人や友だちに食べてもらいたいな。 ・お店の人みたいに上手に作りたいな。
第2次	体験して分担を決めよう 9時間 (ワンタン作りの全工程を全員が体験し, 自分のやりたい仕事を自分で選ぶ)	
第3次	お店の練習や準備をしよう 18時間 4グループに分かれてお店の練習 ・こねこねグループ(生地づくり, 生地の成形) ・スープ&トッピンググループ(野菜切り, スープ作り, 接客, 丼洗) ・具づつまみグループ(具を作って, 皮に具を包む) ・ゆでゆでグループ(ワンタンを茹でる) お店グッズの準備 ・のれんグループ(のれんや店の飾り作り) ・お知らせグループ(招待状, ポスター,	
		↓ 主体的な自我の発揮 ・どうしたらおいしいワンタンができるかな。 ・わたしは, ○○係をしたいな。



(3) お店の準備や担当に主体的に取り組んだ生徒の姿

授業では, 思春期の「自分づくり」に留意し, 本物の見学を通して憧れの気持ちを育て, 全工程を全員が体験することで, 自分のやりたい活動を自分で選びやすくした。また手順図や補助具などの工夫と繰り返しの練習で, 自分でできる喜びと自信がもてるようにした (写真3~8)。



写真3 自分の名札を貼り, やりたい仕事を自分で決める。



写真4 まずは, 自分で自分のを作ってみる。



写真5 工夫してワントンの具を包む。

開店の当日は, 店長中心にみんな生き生きと張り切り, 実演もみごとだった。「いらっしゃいませ」の声も大きく活気があり, お客さんから「おいしかった。」「『ハッスル亭』らしくみんながハッスルしていてすばらしかった。」などの感想をいただき, みんな嬉しそうだった。また自ら挙手し, 「えらかったけど, またしたい。」と感想を言った生徒があった。きっとみんなが同じような気持ちであり, その言葉に友だちと一緒にやり遂げた充実感を感じることができた。



写真6 陶芸でレンゲづくり



写真7 一人で野菜を切り、「もっともっと」の気持ちを満たす。

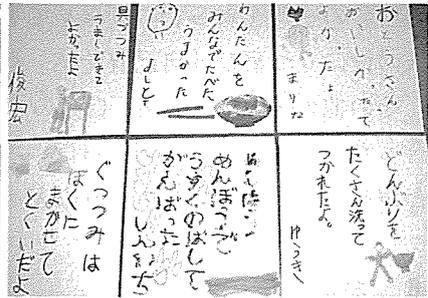


写真8 思い出を川柳にして色紙に清書

5. 子どもたちの変容

子どもたちの内面の成長はそんなにすぐに表れるものではないが、「自分づくり」に留意した授業を積み上げることで、自己肯定感を膨らませ、様々な変容が見られた。紙数の関係からここでは3事例について述べる(注4)。

(1)「自我の拡大期」にあるA子さん

昨年度のうどん屋さんの学習では、信頼できる教師に見守られながら「ポットに線までだしを注ぐ」という好きな活動を保障することで、「もっと、もっと」という気持ちを満たしながら学習に取り組んでいた。今年のワントンの店では、信頼できる教師が側にいなくても、没頭できる活動があればクラスの友だちの中で、野菜切りなど集中して活動できるようになった。

(2)「自我の矛盾拡大期」にあるB子さん

昨年度まで「かしこい自分」を意識しつつも上手くできなかった時のショックは大きく「失敗した」といっては廊下にひっくり返って大泣きをしていた。そんな彼女が少しずつ成功体験を積み上げ、友だちとの関わりを持ち、「がんばっている自分」、「頼られている自分」を意識していく中で気持ちを切り替えていく力をつけていった。そして、今年は「しょうがないなあ」と言いながら一年生を導いたり、悔しくて泣きたい場面でも「先生、がんばってるで。」と言って乗り越える姿が多く見られるようになった。ワントンのお店でも、人参が少し硬いと言われ、それにくじけないで一生懸命薄く切ろうと工夫しながら時間いっぱいがんばっていた。

(3)「自制心の形成期」にあるC子さん

1年生の頃は、人前に出るのが恥ずかしくもじもじしていた。3年生になっても人前はまだまだ苦手意識があった。ところが、ふれあいまつりの本番前、「気合いを入れてくれる人？」の教師の問いかけに自分から挙手。そして、みんなの前に立ち、大きな声で「ふれあいまつりががんばるぞ。エイエイオー」とかけ声をかけてくれた。他の子どもたちも彼女の声に引っ張られるように大きな声を出し盛り上がった。そんなCさんの変容はワントンの店の学習の中華料理店の見学場面でも見られた。店長さんへの質問コーナーの時である。友だちが質問していく中、意を決して挙手し、「自分たちが作ったワントンは、ネギが辛かったです。どうしたらよいですか。」と自分で考えて質問したのである。思いはあってもなかなかみんなの前では行動に移せなかったCさんの成長を感じた。また、ワントンの学習では自ら店長に立候補をし、毎回学習の前に考えてきた今日のめあてをみんなの前で発表し、学習後は反省の司会と店長として

の自分の感想を言った。えらくても大きな声を出してがんばる姿に、自己肯定感だけでなく、人の役に立つ喜び「自己有能感」も育ってきていることを感じた。

その他の子どもたちも、自分のやりたい活動を自分で選んだり、手順図や補助具など自分に合った支援があれば時間いっぱい集中して学習に取り組んだり、学習の準備や片付けも友だちと声を掛け合い協力して行うなど主体的な姿がたくさん見られるようになった。

6. おわりに

平成16年度までに研究部から提起された「自分づくり」の「自己運動サイクル図」及び「自分づくり」を基盤とした「実践創造サイクル図」が、中学部の授業づくりに具体的に生かされ、その有効性が検証されたことが平成17年度の大きな成果と考える。また、自分づくりを基盤にした合同生活単元学習を通し、友だちと一緒に生き生きと活動する中で生徒一人ひとりが満足感と自信を持ち、自己肯定感をふくらませ、仲間とよりよい関係を結んでいく姿に「生活を楽しむ」確かな力がついてきていることを確信している。これは、合同の学習に取り組むことで、生徒一人ひとりの自分づくりの段階や支援の仕方、目標設定を複数の教師の視点で検討してきた成果でもある。

一方、内面の心の育ちをどう捉え評価するのかその視点がやや曖昧であり、単元ごとの評価を含め学習の記録を次年度につなげる記録の形式も不十分であり、今後の課題である。また、自閉症の生徒に対して、構造化や視覚支援、見通し等に配慮した支援を工夫してきたが、アンバランスさのある自分づくりの発達をどう支援するのか、無理なく集団の活動に参加し友だちとの関わりを育てていくためにはどんな手だてが必要であるのか等についてもさらに研究を深めていきたい。

《注》

- 1) 鳥取大学附属養護学校中学部「思春期の自分づくり（中学部の実践）」、渡部昭男・寺川志奈子監修『「自分づくり」を支援する学校』明治図書、2005年、142～165頁所収。
- 2) 「特殊教育諸学校小学校・中学校学習指導要領解説養護学校編」に記述されている「備えるべき条件」を参照のこと
- 3) 中垣克彦・他『「生活を楽しむ子」をめざした実践の創造』『鳥取大学教育地域科学部 教育実践総合センター研究年報』第13号、2003年、64頁の図2『「生活を楽しむ子」の姿』を参照のこと
- 4) 「自我の拡大期」「自我の矛盾拡大期」「自制心の形成期」などについては、鳥取大学附属養護学校研究部「自分づくりの段階表」『「自分づくり」を支援する学校』上掲、28～30頁、寺川志奈子「心の育ちをはぐくむ支援のあり方」同書、31～59頁を参照のこと